

植 調

第 1 卷
第 6 号

昭和 42 年
11 月 発行

財団法人 日本植物調節剤研究協会編

目 次

栽桑とケミカル・コントロール (農林省蚕糸試験場 栽桑部長 伊東正夫)	1
除草剤の今後の方向(6) (農林省農事試験場 農学博士 荒井正雄)	4
登録除草剤一覧.....	7
植調協会だより.....	24

野 火

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 河 田 党

除草剤の中でも、枯草剤については、草が枯れた後その残骸が邪魔になって困るという訴えをよく聞く。確かにその後の耕耘等にも邪魔になるし、また干拓地などでは余り有機物が土に入り過ぎると、肥料分過多、或は腐植過多による色々の障害を起こし易い。だからといってこれを燃やしてしまうとしても、そう思うように燃えてくれない。その理由の1つには、乾燥不十分の場合もあるが、また1つには立っている枯草はその部分だけはポーと燃えるが、横に移って行かず、一部分燃え終わるとしばしば消えてしまう。ところが冬の枯草は、冬の初めの間はこれと同様な

性質を示すが、冬が段々深くなって行くと、日本の太平洋側の地域では旱天が続き、よく乾燥し、加うるに適当に倒れてくるので、非常に燃え易く、野火は四方八方に燃え広がって、消すに消されなくなることがしばしばある。林地の下草、特に近頃大都市近郊には、田畑が潰れ地となって草原に化している所が少なくなく、これからのこういった場所の野火は、頭痛の種である。従来、乾燥剤は幾つか実用にも供されているが、湿草剤というようなものは1つもない。潮解性の物質でも応用して、野火の延焼を防ぐ工夫はないものだろうか。